文化服装学院　学校関係者評価委員会　報告書

文化服装学院　自己点検・評価委員会

2022 年 12 月 14 日

目　　次

1.　報告書骨子　2

2.　学校関係者評価委員　2

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価に対する総評　3

4.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価への提言

1）教育理念　4
2）学校運営　7
3）教育環境　10
4）学修成果　12
5）学生支援　15

5.　学校関係者評価を受けて　23

6.　学校関係者評価委員会開催日程　24

1.　報告書骨子

学校関係者評価委員会（以下、当委員会）は、文化服装学院学校関係者評価委員会規程に基づき、平成 25 年 4 月 1 日に設置した。当委員会は文化服装学院（以下、本学院）の自己点検・評価の結果について客観性と透明性を高めるとともに、学外の関係者から専門的な助言を得るため、外部評価を実施する機関として組織した。

当委員会は、本学院の自己点検・評価を基に、自己点検・評価委員会の内部評価を参考に、関係教職員との具体的な意見交換を通して、本学院の学校運営・教育活動について検証・評価及び助言を行うことを目的として実施している。

当委員会委員は外部委員のみで構成され、本学院の教育理念を理解し、人材育成等に精通した学外の関係者の中から学院長が選考し、委嘱している。委嘱された委員は下記のとおりである。

2022 年度は、2021 年度の本学院の取組みに対し、当委員会としての評価・助言をいただいた。本報告書はその評価・助言をまとめ作成したものである。本報告書に記載した評価・助言は、具体的な事項であり、本学院の発展に資するという考え方に則り、過度に要約することなく記載している。

本報告書の作成にあたり、当委員会の委員の方々には、お忙しいところご尽力いただき、改めて深く感謝申し上げる。

2.　学校関係者評価委員

委員長　　澤田勘志（株式会社 MORI パーソネル・クリエイツ　代表取締役社長）
委員　　芦川照和（SUN デザイン研究所　プロデューサー・本学院卒業生）
委員　　中本文太（株式会社 TSI ホールディングス　管理本部人事部長）
委員　　松本ルキ（株式会社オールファッションアート研究所　代表取締役・本学院卒業生）
委員　　木島　広（株式会社フクル　代表取締役・本学院卒業生）
委員　　矢野　剛（株式会社繊研新聞社 取締役　編集局長）

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価に対する総評

世の中は「With コロナ」のフェーズを迎え、リアルな体験やコミュニケーションを欲する揺り戻しが起こっている。一方で「感染防止対策」という目的を昇華して、不可欠なコミュニケーション手段となった“オンライン”“デジタル”は、サスティナブル、SDGs 等の文脈からも必要不可欠なものとなり、ファッション業界、そしてファッション教育の現場においても、「DX（デジタルフォーメーション）」による問題解決、新たな価値創造への土壌が整いつつある。あらゆる場面で、スパイラルアップした環境に対応した取り組みの推進に一層の期待が寄せられている。

本学院においても、リアルとデジタルの垣根を超す変革に同時並行的に取り組んでいることを評価する。新たなチャレンジに対し、良くなったという実感を伴う成果に期待している。

変化の時代にあっては、本学院の構成員並びに関わる人々（例えば教員、職員、学生、企業等）における問題意識や課題認識の収集や本学院に対する期待をリサーチすることも有効だろう。その際、対象者におもねたり、短期的なニーズに即応し過ぎることなく本質を見極め、将来を見据えた上で、自分たちの強み、長所を把握し、分析することを忘れてはならない。ファッション界を牽引する人材育成を担う本学院としての強みを、世界基準のものさしを置いて創ることが必要である。

社会との関わりという点において、組織としてハラスメントの問題、法令遵守の意識づけに取り組むことは、引き続き重要である。

また With コロナの苦しい状況の中ではあるが、学生のキャリア形成のための支援は、求める人材、スキルの変容などの情報収集の強化と、各所の連携による学生へのきめ細やかな対応により、成果を上げていることを評価する。さらに視野を広げ、どのようなキャリア教育が必要なのかの議論を行っていくことが、教育機関の責務として肝要である。

法令遵守、社会的責任、ダイバーシティ、サスティナブル、サーキュラーエコノミー、社会貢献など、引き続き取り組むべき課題、取り入れるべきことは多く、方向性を見定めるのは難しい。激動のファッションビジネス業界においてファッションの価値をどのように捉え、表現し、受け入れてもらうか、共に考え抜ける感性・力を養うべくそれぞれの課程の学びを一層充実させる一助として、社会との共生やファッションを通じた社会貢献の視点を持った実働を今後も継続的・持続的に行いつつ、単なるコラボレーションに留まらない、「共創教育」という高い視座による取り組みに向けた仕組みづくりを強く期待する。

約 100 年にわたる伝統を守りつつ、本学院の更なる発展を期待している。

4.　学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価への提言

2021 年度自己点検・評価において、本学院が設定している評価項目に対する委員からの提言は以下の通りである。

1)　教育理念

①文化服装学院の教育理念、人材育成像

［本学院の現状］

服飾に関する専門知識・技術の教授を研究し、服飾教育界・ファッション産業界に貢献すると共に、高度な技術と教養を備えた創造性豊かでグローバルに活躍できる人材を育成することを教育の理念としている。

4 つの専門課程を設置し、それぞれ世界に通用するオリジナルのカリキュラムをもって学生の自主的な学修を促進し、学生が常に新しい知識・技術を追求し、自己の能力を自律的に探究し、問題解決能力を育てるための創造的な学修方法と場を提供することにより、積極的な役割を果たしていくことが本学院の使命と考えている。一人ひとりの個性を大切にし、そのオリジナリティや美意識で磨き抜かれた感性、国際的・多様化に対応できる人間力を身に付け、高い専門知識と技術を習得した学生を育成することが、本学院のファッション教育の方針である。

本学院が 100 年にわたって継承してきたつながりを生かした教育として、学内の課程を超えた協業で実施される行事や機械の提供と、卒業生や企業等の学部団体との協力を得て実施される学びの場の提供を通し、共創教育を実施することを追記した。

［学校関係者評価委員からの提言］

・時代背景や取り巻く環境変化も踏まえ、内容をよく検討している。
・企業において早期に戦力となれるよう、その時代その時代のアパレル関連企業が学校に求めていることを提供できる必要性もある。また、過去に日本はフランス、イタリアに次いでファッション感度の高い国民性と言われており、本学院からも多数のクリエイターを輩出してきた。もう一度、日本にファッションの感性を取り戻せるよう、本学院の力が必要だと感じる。
・自律的問題解決能力育成とグローバルに対応した学習の場として期待ができる。
・これからの時代、温故知新と新しい価値観・感性・社会通念・テクノロジーなどと向き合い、社会共生の認識も合わせて理念と出来れば良い。
・IT,AI,IoT,web3 などのデジタル×ファッションのように日本にある本学院としての強みを創る必要性がある。方法の検討を望む。
・「共創」の意味が企業や産業界だけでなく、生活者や社会という意味を含めるのであれば高く評価する。社会的責任を明記したことも評価する。

②課程及び関連科目の教育理念、人材育成像

［本学院の現状］

各課程および関連科目は、各課程の役割に基づいた人材育成像を達成するために、時代や社会情勢の変化に対応した要素を検討、抽出し、教育実践を行っている。

［学校関係者評価委員からの提言］

・そもそも「理念＝俗に、事業・計画などの根底にある根本的な考え方。（広辞苑第七版抜粋）」となり、本項目の評価点が満点でないことはあり得ないと考える。
・現在のように急速な環境変化や業界の動向などを、毎年詳細分析し、都度本項目（各課程の理念含）に反映させるべきと考える。
・我々学校関係者委員が学生側の意見も聞く機会があれば尚評価に対する意見具申がしやすくなるだろう。

1.　服飾専門課程

・共創教育、特に「国内外のファッション企業や卒業生のネットワーク、コラボレーション事業、インターンシップといった外とのつながり」は良い。
・「問題を発見し解決していく能力」は基礎学力を含めた「地頭」と呼ばれる能力が必要となるので、それをどのように伸ばしていくのかの記述もあるとよい。
・世界水準でも高い評価を得ているmade　in　japanを支え、国際社会にもう一度日本のファッション産業が認められるようアパレル企業との連携を強めるとよい。
・オンラインツールの活用と対面授業の両面の対応状況は、目下のウィズコロナの時代に留まらず、アフターコロナに向けても適切である。

2.　ファッション工科専門課程

・ファッション業界で企画や技術の仕事に就く場合にも、まずは店頭での販売からキャリアをスタートさせるケースがかなり多くなっていることから、専門職においてもコミュニケーション力や、人間としての豊かさを育み、かつ、知識や確かな技術力が必要とされている。
・生産システムコースにおいては、工場との実践の場でロジカルな根拠に基づいた交渉力も必要となるので、プレゼン力の向上を目指していくのが良い。
・ニットデザイン科に関しては、アパレル各社もニット製品はOEM・ODMへの外注が非常に多い状況は周知の通りである。そのような企業との産学連携の場を数多く提供することで、それがインターンシップの役割も果たし、将来につながっていくと思われる。
・原材料含めた生産プロセス、マーチャンダイジングは SDGs、デジタル化など大きな環境変化に直面しているが、世の中の変化の本質をとらえ、ファッションに反映する

ことのできる人材が求められていると感じる。教育課程の中でそうしたカリキュラムを構築する指針として、この理念・人材像が機能することが重要と考える。
・時代に即した教育理念になっており、課程・科の特色が反映されている。
・社会人の基礎は大切である。人間性と創造性の両立はリベラルアート的要素であり、世界的に注目されている。環境問題への取り組みなど産業課題への対応を明記されたことも高く評価できる。

3.　ファッション流通専門課程
・スタイリストコース、モデルコース、メイクアップコース以外はすべて接客対応のカリキュラムが必要だろう。企業においては店頭での販売経験を経て本部の各職種に異動となるため、店頭で活躍できるスキルが必要である。
・とくに店頭の役割が大きく変わる中、そこを目指す学生にどのようなモチベーションをもって、どのようなスキルを身につけさせるのか、産学での検討が重要だろう。
・多様化する流通形態に即しており、特徴を捉えた人材育成像が明瞭になっている。
・ファッション流通専攻科の人材像を明記されたことを評価する。業界の様々な企業や団体、人を繋ぐことで、新たな価値を創造する、そんな人材が必要である。

4.　ファッション工芸専門課程
・ファッショングッズのクリエイター育成機関は非常に限られているので、本学院における各科の存在意義は大きい。外国人との体型差が問題となりにくいファッショングッズに関してはグローバルな活動に対して高い可能性を秘めていると思われる。クリエイターによる生産現場の理解は大切である。
・各アイテムの原材料含めた生産プロセス、マーチャンダイジングにおいても、SDGs、デジタル化など大きな環境変化はこれからの与件となっているが、世の中の変化の本質をとらえ、各アイテムの在り方に反映することのできる人材が求められている。教育課程の中でそうしたカリキュラムを構築する指針として、この理念・人材像が機能することが重要である。

5.　①Ⅱ部服装科　　②Ⅱ部ファッション流通科
・基本的に取り組みは適切だと評価する。コロナの影響拡大で働く場を失ったり、働きながら学びなおす人たちが増えており、Ⅱ部の役割はますます大きくなると思われる。そのあたりの取り組みへの言及が欲しい。
・世の中を知る、という意味では、この課程に所属する学生の問題意識やモチベーションの基礎となっているものは非常に興味深く、また有用であると感じる。昼間部の学生とのコミュニケーションなど企画してはどうか。

6.　関連科目

・「語学」に関しては、グローバルに活躍する場合だけでなく、海外企業の日本法人に勤務した場合、語学力がなければ管理職になれない。企画職、営業職、その他の様々な職種で語学力が求められる。

・「手芸」に関しては、検証の中で手仕事分野の衰退とあるが、デジタルの発達によりむしろ個人で制作した作品をネット販売している若者も増えている。副業を認める会社も増えているため、「手芸」分野で活躍できる人材も増える可能性があると思われる。

・今後特に「情報教育」「アパレル素材・染色・ウィービング・品質論」「語学（特に他文化への造詣)」「生産管理・量産技術実習・CAD」の各分野の再検証・再構築が急務と思われる。改めて精査する必要がある。

・高い山には広い裾野がある。こうした関連科目への取り組みが、それぞれの課程の学びを充実させることが学生によく伝わっているか、ということの検証を望む。

・専門性を高めるための教育理念が明瞭であり、関連科目の位置付けが適切である。

・現在はデザインやビジネスにおける専門性の拡張、あるいは普遍的なクリエイティビティと IT 技術の融合といった点が求められている。その点から、各科目がやや分散的に見える。本課程との関係性を明確にすることを期待する。

2）学校運営

①法人組織　②学校組織

[本学院の現状]

法人では、昨年発足した業務改革支援室が、学園の総合的な業務の効率化に向け継続して承認ルートや規程の整備などを行い、電子決済システム構築を推進している。また、多様な働き方へ対応できるよう、勤怠システムの選定を行い、導入プロジェクトチームを発足した。

事務局および教員組織における情報共有の推進を継続しておこなっており、情報共有の意識は確実に浸透してきている。コロナ禍により対面での開催が難しい状況ではオンライン会議を用いるなど、積極的に ICT 技術を活用し、情報共有の効率化を推進した。

[学校関係者評価委員からの提言]

・授業や施設などを見学し、実際の学校内の状況を確認する機会があれば、より実際的な評価が行えるだろう。

・IT 戦略室が経理部門に紐づいているが、システム部門はないのか。

・SDG’s 問題、ESG（環境・社会・組織統治）問題、法務関連など、企業運営を取り巻く環境は今までに無いスピードで変化が見られ、規模を問わず各企業も大きな課題として取り組んでいる。教育機関もしかりである。
・それぞれの組織（教員、職員、委員会など）の観点から様々な検討や取り組みを行っていることは評価する。一方で、それぞれの構成員から問題意識・課題認識を収集するような取り組み（企業でいう、組織や仕事に対する満足度調査、組織診断のようなもの）や、学生に対するリサーチは行われているか。例えば企業が顧客に対して行う調査（NPS など）も参考になるだろう。対象者におもねるという意味ではなく、自分たちの考えている強み、長所がしっかりと活かされてるかを把握する一つの取り組みとして参考とされてはどうか。
・業務の改善に関して、業務に合わせたシステムだけでなく、システムに合わせた業務設計など多角的に評価する専門の人材が必要に思える。
・業務負担の軽減を合わせた「学校の教育理念改革」が必要に思う。
・EdTech などを取り入れ業務のスリム化→個々の学生との関係性を高める取り組みを行う必要性がある。
・継続的に改善されていることは評価できる。今後の検証による効果測定などに期待する。ただ、委員会が多すぎると感じる。総合的な視座をどこで構築するか、やや不鮮明だと感じる。

③財務状況

［本学院の現状］

新型コロナウイルス感染症拡大で通常の学生募集活動ができない状況の中で、本学院独自のガイダンスを行うなど様々な工夫や努力をしたが、予算学生数を若干下回り目標を達成することはできなかった。一因としては、新型コロナウイル感染症の影響が続き、海外から入国ができないために留学生数が減少したことが考えられる。

全学的な施設関係・設備関係の支出増加が見込まれるため、引き続き経費の削減に取り組むとともに、学園全体の人員配置の見直しを行い、人員補充を抑制し、人件費の削減に努めている。

［学校関係者評価委員からの提言］

・現時点の総合的な財務は良好だが中長期に懸念がある。
・少子化による授業料収入の減少は想定せざるを得ない。外国人留学生数の増加が今後の大きなカギになるだろう。
・自前で研修施設を維持するとコストが大きくかさむので、必要に応じて施設を借りる方向に移行してはどうか。研修施設の所有と運営の切り離しの検討が必要だろう。
・人件費については、教員の質・教育効果を経営の観点からどうとらえるか、全体とし

ては人件費も含め全体の経費構造について中長期的な目標・考え方の整理と共有がなされているか、が肝要である。

・出版事業は損失が抑えられたが、事業の内容について早期の改革と収益改善が必要である。書籍販売から WEB×EdTech×エンターテインメントなどを融合した新たな投資が必要だろう。

・不動産事業の利益について著しい収益の減少がみられる。引き続き中長期でのテナント需要は下がる影響を想定した危機管理が必要である。

④法令等の遵守

[本学院の現状]

法令遵守、ハラスメント防止については、注意喚起を継続して行うとともに、オンラインによる研修を実施した。また、学生へ向けた個人情報保護の意識向上に努めることに継続もして取り組んだ。

学生相談室と連携し、学生等からの相談内容を必要に応じて共有し、担当教員に確認を取りながら、適切な注意、指導を行い、状況の改善が見られた。

今年度は、ハラスメントに関する統計調査は実施しなかった、次年度は実施をし、分析、対策を講じる予定である。

[学校関係者評価委員からの提言]

・課題認識はあっても、現状把握のプロセスに至っていないとすれば、対策を講じることは難しい。

・個別事象への対応は適切に進められているが、全体の状況を把握・共有することも同時に進めるべきである。

・ハラスメントに関する調査を実施することを提案する。調査することでハラスメントがないという安心感も得られる。

・個人情報保護やハラスメントに関する周知徹底もよいが、IT システムなどの仕組みで改善できる方法はないか検討を望む。

・各種規定の点検、ハラスメント調査など課題解決に期待する。

⑤社会貢献等の取組

[本学院の現状]

例年文化祭バザー作品売上金を寄付する社会活動を実施してきたが、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により一般の来場者が参加する文化祭が中止となり、売上金寄付する社会活動は実施できなかった。

学友会活動の一環で行なう「赤い羽根募金」と「口と足で描く芸術家協会作品の販売協力」は、社会事業専門委員会の学生、教員の尽力により実施した。課題作品製作過程

で発生した残布を回収し、無料で希望学生に配布する活動を学友会委員が中心となって開始した。企業から提供された残布も含め、学生が課題作品制作に活用することを目的としている。今後も学習活動を行いながらゴミを減らす社会貢献として次年度も継続して取り組んでいく。

学びの場を広げるべく、生涯学習講座としてオープンカレッジと通信教育を実施している。オープンカレッジ、通信教育共にオンライン講座を積極的に開発し、ライブ配信、オンデマンド配信、対面授業を組み合わせた授業を企画実施するなど、新たな受講生を獲得することができた。

［学校関係者評価委員からの提言］

・常に学院独自の取り組みを行っている。引き続き社会貢献につながる活動は続けることを望む。
・企業の採用の現場において、企業の社会貢献意識は応募者の重視する項目の上位に挙がる時代となっている。この領域に注力・アピールすることは高校生・留学生の進路選択に大きなアドバンテージを持つことになると思われる。
・残布の回収と配布などのコロナ禍にできる行動に移したことは高く評価できる。身近にできるところから社会貢献活動を客観的評価する仕組みづくりも良いだろう。
・コロナ禍でも実現可能な施策を、学生ならではの自由な発想で打ち出していくような企画案募集など、新たな切り口も考えられるのではないか。
・生涯学習講座の見直し、新規企画立案のため本学院教員をアドバイザーとしてブレストミーティングを開催し、公開講座を新たに５講座も設けるなど、前向きな取り組みが評価できる。
・活動自体は評価する。ただし理念から見ると、やや「できること」にとどまっているように感じる。学生や外部のアイディアも取り入れながら、発想や視野を広げていくことに期待する。

3）教育環境

① 施設・設備

［本学院の現状］

新設コース並びに、クラス数増の科があったが、全体ではクラス数が減り、空いた教室を講義室や実習室に転用し、授業運営に支障が無いよう調整を図った。施設・設備・備品の計画的な管理・運営については、恒常的で重要な課題であり改善に努めている。学園全体での調整を引き続き行っていく。

学園のバリアフリー計画を開始し、本年度はＣ館南側に自動ドアを設置した。

［学校関係者評価委員からの提言］

・学院としては、活用しうる資産を十分に活用し、柔軟に対応している。また、年々そのプロセスもスムーズになっている。
・前進している。ただし、学園全体の課題として対応すべきものであれば、その全体状況を判断しうる資料を開示いただきたい。継続すべき課題と認識している。
・教室や実習室、施設の計画的な整備を行いバリアフリーなどに対応していることを評価する。
・施設の有効活用としてシェアリングサービスの活用や、事業化を検討してはどうか。

② 付属機関・施設

［本学院の現状］

学生に対し情報や機会を創出し提供する学修支援機関・施設として、図書館、服飾博物館、ファッションリソースセンター、国際交流センターを設置し、学内外における活動の広がりを支援する積極的な取り組みを行っている。

学生に対し生活をバックアップする生活支援機関・施設として健康管理センター（医務室）、文化購買事業部、学生食堂、文化北竜館、学生寮などを設置している。

対外的な活動の広がり支援と共に多角的に学生への還元を目的に、文化・服装形態機能研究所、国際ファッション産学推進機構など研究機関や付属機関、施設を設置している。

なお今年度は、新型コロナウイルス感染症の状況に応じ、各施設が自らの存在意義を活かせる方法、ツールを模索し、感染対策を講じつつ積極的に各支援を行った。

［学校関係者評価委員からの提言］

1. 教育・学修支援

・ファッションリソースセンターや、国際交流センターの活動は高く評価できる。非常に良い活動を行っている。
・コロナ禍における対応が確立しつつあり、情報や機会を創出し提供する施設として機能できているということを評価する。
・国際交流においても、リモート環境を十分に活用した、新たな形、新たな取り組みが進められている。
・歴史的に貴重な収蔵物を多数保管しているがデジタルデータとしての質が低い。服飾資料館・ファッションリソースセンターのデータベース化をさらに進めることが望ましい。
・図書館のアーカイブはデジタルデータ化されている。画像のテキストを OCR を用いてテキストデータとしてデータ化することでさらなる活用が見込める。

2. 学生生活支援

・健康管理センターについて。コロナ前からメンタルの不調を訴える学生が増加傾向とのことだが、オンラインでの健康相談なども実施できるといいだろう。
・購買部や食堂など、快適な学生生活が送れるような取り組みがされており好ましい。今後もこのような流れで取り組むことを望む。
・学生食堂など、外部委託事業社との協同企画（事業）等でフードロス問題や貧困家庭・感染者支援など一歩踏み込んだ考え方が出来ないか、検討をしてはどうか。
・学校での学びにおいて人との接触が大幅に制限される中、コロナ対策も機能させつつ生活の面で充実したサポートを提供していることを高く評価する。
・「学生の生活を守る・支援する」といった基本的な姿勢は不変のものとして充実させるべきものである。
・学生に対するサポート体制は充実している。
・施設・設備の老朽化に計画的対応が望ましい。

3.　研究・対外活動
・文化・服装形態機能研究所の活動は継続し、データを積み重ねていくことが重要である。引き続き社会貢献として、社会全体のためにも進めることを望む。
・国際ファッション産学推進機構の活動も大変意義深い活動であったと思う。直接的な学園の利益にはならなかったかもしれないが、新人クリエイターの育成などファッション業界の底上げに繋がる活動は大きな意義があった。
・産学連携の事例がさらに増えることが望ましい。

4）学修成果
①キャリア支援
［本学院の現状］
学生への求人情報訴求力を高めるため、全ての求人情報を速やかに見られるよう情報の配信方法を変更した。企業情報や求人情報へのアクセスがスムーズに行われ、受験機会の創出と就職率向上につながった。
コロナ禍による選考のオンライン化に対応すべく、就職支援室以外でオンライン対応できる環境の確保に努め、昨年の 4 倍近い活用となった。
下級年次からの就職活動の取り組み強化策として、ファッション流通科 1 年では、キャリア開発授業と連携し、6 カ月間で約 90％の学生と進路・就職面談を行った。就職活動の仕方やインターンシップ参加の意義を理解することで、就職活動の早期推進につなげることができた。

［学校関係者評価委員からの提言］
・オンラインや SNS を活用し、コロナ禍で混乱しかねない学生への適切な指導・情報提

供ができていることを評価する。

・50 社におよぶ企業開拓は他の大学・専門学校に比べ相当の力の入れようだと感じる。

・キャリア教育との連携も行われており、就活のみならず、社会に出てからのキャリアアップ・キャリアステップに関しても指導しており評価できる。

・コロナ禍における環境変化や、衣料流通需要の変化、企業の雇用環境、地政学的環境の変化などへの対応が求められ、従前の手法ではままならない状況が訪れる中、具体的にどの様な活動を行うかが大きな課題である。

・難しい情勢の中、就職率のアップという成果は素晴らしい実績として評価する。

・様々な取り組みに対し、学生から見てどうか、という視点は極めて重要である。

・前年の繰り返しではあるが、現在、ファッションビジネスに身を置く企業は、世の中が求めるファッションの価値をどのようにとらえ、表現し、受け入れてもらうのか、これまでにない自問を繰り返している状況である。そういう意味では学生と同じスタートラインに立っている。一緒に考えていく若い感性・力を求めている。そうした状況を企業と学校で共有し、学生に伝えていく機会を新たな発想で作り上げられていくことを期待する。

・学習支援についてはこれまでの取り組みで成果が出ている。しかし、アフターコロナとして訪ずれる変革として、「ソフトの地方分散化」があり、キャリア支援・就職活動支援等で地方に目を向けることも必要だろう。

・IT スキル・デジタルアプリケーションに触れる機会を増やし、表現の方法を増やすことも強みとなるだろう。支援の充実を検討してはどうか。

・留学生の就職支援も日本人と同じように行えると良い。

・様々な取り組みにより就職率が向上するなど成果が出ており、継続に期待する。ただし、就職活動の比重があまり高くなりすぎることへの懸念がある。企業に合わせることが、必ずしも専門性を高めることととはイコールではないと考える。

②資格取得支援

［本学院の現状］

資格取得支援として、授業の一環としてカリキュラムに検定試験の受検を組み込む学科が増えている。各検定試験取得によって得られる学修効果や技術の向上等、受験の意義や資格取得メリットの周知に引き続き取り組んでいく。

［学校関係者評価委員からの提言］

・資格取得については、受験率や合格率といった数字での効果測定を評価表に入れてはどうか。

・学内外に、各種試験の主旨・必要性・メリットを十分に説くことが重要である。

・企業側は資格の有効性や重要性を認識している。学生への啓蒙が大事である。

・資格取得のメリットや、各企業が資格取得者に対して具体的にどの様なリワードを与えているかを掌握し、学生に提示していくことが重要である。資格取得の意義と必要性は各個人で異なるため、コミュニケーションが重要である。
・各種試験の課題について、取り組みがなされており、取り組みの前進を評価する。

③ 学生相談体制

[本学院の現状]

コロナ禍で、登校を制限された学生のニーズに合わせ、困りごとを早期に発見・介入するために、対面面接に加え、電話、オンラインによる相談体制を整えている。

日常のサポートだけでなく、進路決定のための行動化を学生に促し、学生生活に具体的な変化をもたらす介入を就職支援室を含む教職員や学内外及び保護者と連携し、包括的なサポートを行った。

外部機関の協力を得て、障がい学生に対し、卒業後の自立支援に向けた足掛かりを構築した。

[学校関係者評価委員からの提言]

・障がいのある学生との良い出会いを求めている企業は多いと思われる。前向きに社会に出る気持ちを持てるような施策を期待したい。
・障がい者に対する支援については、外部とのより緊密な連携が必要となる領域である。企業の特例子会社等、新たなチャネルの開拓等に協力できればと考えている。
・コロナの影響で学生からの相談件数はかなり増えていると思われるが、これまでのノウハウを生かし、サポートしている取り組みを評価する。年々充実してきている。

④ 経済支援・健康管理

[本学院の現状]

新たに導入された日本学生支援機構給付型奨学金について、各種説明会や本学院ホームページを活用し周知に努めるとともに、クラス担任の協力のもと丁寧な告知を行ない、在校生への周知及び申請はほぼ滞りなく進められた。

貸与型奨学金の返還に関する意識が低い学生が依然一定数いるが、返金に関する書類の提出の際から細やかな指導を行うなど適宜対応をするなど、意識向上にむけ継続して取り組む。

健康診断は、新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けたが、実施方法工夫し、例年通りの時期に実施した。

[学校関係者評価委員からの提言]

・奨学金制度の運用改善は評価すべき項目である。返済の必要な奨学金については、計

画的な返済を十分に指導することの必要性は変わらない。
・健康診断の受診率が 96.2%と非常に高い。しっかりとした取り組みができている。
・経済的支援・健康管理等これまでの運営ノウハウが活かされている。
・引き続き理解しやすい情報提供を望む。

⑤ 卒業生・社会人への支援

[本学院の現状]

卒業生の会であるすみれ会ではすみれ会の認知向上及び卒業生の活躍を紹介することを目的にすみれ会公式サイトの新たな卒業生紹介企画を企画し、本学院の公式ホームページサイトにおいても紹介を行った。

将来ファッション業界で活躍しすみれ会員として積極的に活動する人材を育成する目的で在校生対象の給付型奨学金を今年度も実施し 5 名に奨学金を給付した。

文化学園創立 100 周年に向け、法人及び本学院での企画進行の状況に合わせ、すみれ会においても企画の立案を開始した。

卒業生の転職・再就職支援の充実を図るため、提携している人材紹介企業の見直しを行った。これにより更にアパレル企業に特化し、卒業生への支援の充実が図れた。

[学校関係者評価委員からの提言]

・文化服装学院の同窓会組織は、社会で活躍するためにも有効なネットワークであるので、若年層に響く様々なイベントを準備するなどして、参加を促すのが良い。
・すみれ会ホームページの求人案内ページへアクセスすればかなり高い確率で転職先が決まる。しかし、卒業生がアクセスしてくる頻度は高くないため、卒業生への周知、活用を期待する。
・創立 100 周年を迎え、多くの卒業生が多方面で活躍する本学の財産である卒業生組織を、有効に活用し切れているのか判断に迷う。
・継続性をもって長期的に取り組むべき項目として、卒業生との連携施策が年々充実していくことは素晴らしい。また、環境変化にも柔軟に対応している。
・１００周年の取り組みにおいて、本学院とすみれ会の連携を期待する。
・すみれ会が誰のためにあって、何に活かされるかの議論が必要ではないか。イベント・講演会だけでなく新たなコミュニケーションツールを交えた交流の検討も必要だろう。

5）学生支援

①学校のカリキュラム編成

[本学院の現状]

各科の人材育成目的に合わせて、基礎から実践力まで専門知識をしっかりと身に付

けさせるために、教育課程編成委員会を主管に随時カリキュラム編成の見直しを行っている。

ファッション業界の「製造」におけるデジタル化の加速に伴い、既に授業として導入されている 3DCAD について、コンピュータを使い 3 次元（3D）でデザインを行うことができるクリエイターやモデリストの育成を目的とした新たな学科やコースの設置を目指し具体的に検討していくこととした。

教育においても情報技術の活用を行うべく、教科書のデジタル化を推進することを決定した。

［学校関係者評価委員からの提言］

・すでに 3DCAD の授業も導入済みという対応の早さは評価する。どのようなカリキュラムが即戦力として歓迎されるか定期的な企業へのヒアリングが必要である。
・カリキュラム編成が常にアップデートされるよう取り組んでいることを評価する。
・常に外部との連携を意識し、時代に即したカリキュラムの改善を進めていることを評価する。
・業界を取り巻く環境は、環境・持続可能性といったキーワードに象徴される、より根本的な変化にさらされていることを実感する昨今において、継続的かつ実証的なアクションを引き続き期待する。
・これまでのカリキュラム改善に一定の効果があり、取り組みは素晴らしく高評価。
・実践的なカリキュラムとともに、学ぶ為の環境や仕組みづくりの改善を期待する。
・今後、留学生が増えグローバル化する校内に最適化されたカリキュラムの開発が必要である。
・３D への取り組みが前進しており高く評価する。新たな学科やコースに期待する。

②課程・教科のカリキュラム編成状況・授業研究

［本学院の現状］

それぞれの課程及び学科は教育理念、人材育成像の具現化に向け、特色を持ったカリキュラム編成を行っている。

実践的な教育を行うため、特別講義、カリキュラムの見直しを行い、コンテスト活動やインターンシップ、企業とのコラボレーション活動など、学びの場が広がるよう授業研究を絶えず実施している。授業等の実施方法は、新型コロナウイルス感染症の影響により、学びの特性を鑑みつつ、対面、オンライン、オンデマンドなどを選択した。

［学校関係者評価委員からの提言］

1.　服飾専門課程

・オンラインと対面のハイブリッド対応や、コンテスト・検定への興味を促す方向性は

評価に値する。カリキュラムの中で就職に対する意識づけを行う授業設定を望む。
・オンラインとリアルを状況に応じて柔軟に取り混ぜ、期待される教育効果を導くことができたということに対し高く評価する。
・コラボレーション、コンテスト活動など積極的に取り組んでおり、特徴を考えた授業内容を評価する。

2.　ファッション工科専門課程
・全体的に評価できる。特に企業とのコラボレーション企画の多さには目を見張る。
・「完成度の高いポートフォリオ制作」に取り組むことが必要である。他校では徹底的に就活向けポートフォリオの指導に力を入れている。表現力やプレゼン能力を身につけるカリキュラムが必要である。
・対面授業の減少により留学生の語学力向上にマイナス面が出ている旨の記載があった。語学学校との連携、オンラインでの語学強化カリキュラムなど、別の角度から補完できる可能性を模索する必要があるのではないか。
・対面、オンラインをハイブリッドさせ、特色を活かしたカリキュラム編成を評価する。

3.　ファッション流通専門課程
・ファッション流通科の卒業生は、とにかく人と関わる場面が多い職種に就くことになると思われる。そういう意味ではコミュニケーションやコンセンサスを得るためのスキルを高めるカリキュラムが必要と感じる。グループワークとプレゼンテーションによって力をつけることに期待する。
・デジタル領域のニーズも高まっている。SNS を含めたコミュニケーションスキルと感度を育成する必要もある。
・オンラインでの販売力強化が各企業の主要課題の一つとなっている状況の中、VMD、スタイリング提案やオンライン接客の経験を十分に積むことのできるカリキュラムは学院の強みの一つになり得ると思われる。時代や業界の変化に対応し、適切である。
・本科が最も変化の激しい業界であり、文化服装学院として、一歩先を見据えたカリキュラムの見直しが必要である。

4. ファッション工芸専門課程
・コロナ禍の状況下においても、積極的に外部と交流する姿勢を含め、創意工夫を凝らし取り組んだことを評価する。
・学習意欲の差、社会常識・行動の違い、心の病等がクラス運営に影響したとのことだが、これは当課程に限らず普遍的な課題としてとらえる必要がある。
・学生の職人気質、アーティスト性が最も発揮できる課程であるため、産学コラボレーションやコンテスト、ネットワーク技術などを活用し、カリキュラムでは得られない

経験と世の中との接点を広げていくことを今後も継続・充実させていくことを期待する。
・コロナ禍におけるインターンシップ・企業研修に変わる取り組みも検討すると良い。
・テキスタイル・帽子・ジュエリー・バッグ・シューズは、専門で学べる学校が少ないので非常に貴重な学びの場である。企業への就職を目指す場合は、ターゲットも限られてくるため、より就職に繋がる産学連携を目指す必要がある。
・カリキュラムの見直し授業内容の改善が行われ、コラボレーションへの取り組みが積極的に行われていることを高く評価する。
・さらなる特色を生かしたカリキュラム改善を行っていただきたい。
・コラボレーションは重要だが企業サイドのニーズだけに引っ張られることの無いよう留意が必要である。あくまで創造力を磨いたり、広げるためのものであるべき。

５．Ⅱ部服装科・Ⅱ部ファッション流通科
・特にしっかりした目標をもって入学してくるⅡ部学生に対し、どれだけきめ細かく個人の意思を尊重できるかが重要。就職や独立にいかに役立つ指導となるか先生方の連携も重要と考える。
・企業においても、ファシリテートする側のスキルを日々アップデートしていくことが必要な状況が生まれている。指導する側のスキル向上と学生側の興味・関心を高める施策を合わせて検討・導入する必要がある。
・対面だけでなくオンデマンドをうまく活用し、生徒の理解度を深化させることにつなげていることを高く評価する。限られた時間で学ぶⅡ部にとって効率的な学びができる。

６．関連科目
・各教科に様々な工夫がみられる。日本のファッションが 80～90 年代のようにふたたび世界で脚光を浴びるよう、学生には品質や語学を広く学んで欲しい。
・ファッションを考え、提供する対象である「世界」や「人間」を理解するうえで、関連科目の授業は非常に重要である。アパレルにおける SDG s などはその最たるもので、今後この観点無しにファッションビジネスは成り立たないというレベルの内容である。この科目群には、ある種の切迫感まで伝わっていることを期待する。
・オンライン授業、対面授業、ハイブリット授業のメリット、デメリットの見極めと、それぞれの良さを生かした授業の構築を行われており高く評価する。

③学外授業
［本学院の現状］
新型コロナウイルス感染症の状況等により宿泊を伴う学外実習については、コミュ

ニケーションキャンプは中止し代替研修をクラスごとに検討して実施、研修旅行は科ごとに実施、代替え研修いずれかを選び行った。

コミュニケーションキャンプ、研修旅行の代替え研修実施における規約の作成並びに、新型コロナウイルス感染症対策等も含む、様々なケースを想定しての危機管理マニュアルを作成した。

学校から紹介のインターンシップについては、緊急事態宣言の発出を受け、受け入れを見送った企業が多く、結果的に自己開拓企業が増加した。

［学校関係者評価委員からの提言］

・コロナ禍で例年の活動ができない中、様々な工夫を凝らし活発な運営ができている。今後ウィズコロナ、アフターコロナとなれば、インターンシップの受け入れ企業は増えていくだろう。就職支援室の協力のもと、1 人でも多くの学生が参加できるよう備えることを期待する。
・豊かな人間性を育むための施策として、学外実習の取り組みを高く評価する。
・オンラインとリアルを状況に応じて柔軟に取り混ぜ、創意工夫を凝らし、期待される教育効果を導くことができた積極的な取り組みを高く評価する。
・コロナ禍のなか、コミュニケーションを大切にし、安全安心を最優先に修正や見直しをしつつ取り組んだことを評価する。

④学校行事

［本学院の現状］

新型コロナウイルス感染症感染拡大下での行事計画、運営のため、感染防止を重視し、実施方法を模索しながら教職員で協力し対応をした。入学式や卒業式は各教室で実施し、文化祭は一般来場者への公開を視野に検討、準備したが、感染拡大の状況を考慮し、来場公開は学内学生、教職員のみとし、一般へはオンライン配信とした。その他、大部分のイベントが中止となったため、代替えとしてオンラインにて著名なデザイナーやスタイリストによる特別講義を実施した。

［学校関係者評価委員からの提言］

・これらイベントにおける「本学院らしさ」とは何か？世の中は、学生は、教職員はそれをどう考えているのか？これらの活動の目的やその目的を果たすための手法を検討・立案するうえで、上記の設問に対する現時点の回答を調査、分析し、共有することが重要ではないかと感じる。
・コロナ禍での様々な対応されているが、文化服装学院らしい取り組みを期待する。
・コロナ禍で適切に運営されている。教育効果測定や学生の満足度向上が課題だろう。

⑤課外活動

[本学院の現状]

コロナウイルス感染症の感染拡大により、各クラスの代表学生である学友会委員による学友会活動に制限があったが、例年研修会にて行う学校側との教育環境改善のための話し合いは、学生達にアンケートを実施し意見を募るなど、工夫をして活動していた。授業以外の学びや経験の場としてサスティナビリティやSDGs分野についての取り組みがなされた。その情報を SNS やオンラインを活用し学友会委員以外の学生へ周知するなど、さらなる活性化へ向け出来る事を前向きに取り組んだ。

[学校関係者評価委員からの提言]

・制限がある中でも、SNSなど様々な新しいツールの活用や、アイディアと工夫ある活動で一定の成果につながったことを評価する。
・SDGｓ関連でも、学生の関心・意識の高さを行動として引き出し、今後につながる成果を得たことを評価する。
・サスティナブル活動はとても評価でき、これを連続多発的に行い、大きな取り組みとすることを望む。

⑥教育・成績評価

[本学院の現状]

新型コロナウイルス感染症の感染状況に対応した試験・評価の実施に向け、試験科目や登校者数、教室定員や日本に入国できていない学生を含む試験日に登校できない学生への対応などを再検討、調整を行い実施した。

[学校関係者評価委員からの提言]

・大きなトラブルなく様々な対応ができたとを高く評価する。引き続き状況に合わせた対応が取れるよう、今一度、検証することを望む。
・コロナ禍に教育効果や、適切な評価ができたことを評価する。

⑦退学者への対策

[本学院の現状]

退学の理由は例年と変わらず進路変更や学業不振、健康上を主な理由としているものが多い。新型コロナウイルス感染症の影響や、オンライン授業体制について言及している学生もおり、新型コロナウイルス感染症が少なからず関係していることがうかがえる。また、新型コロナウイルス感染症の影響による家計状況の悪化を理由としているケースもあり、様々な側面で影響がでてきている。

外国人留学生の退学者に対する動向確認を学籍担当者が母国語で対応することで、

指導をスムーズに行うことができた。

［学校関係者評価委員からの提言］

・体調やメンタルの問題であれば早く気づき介入することが重要である。オンライン授業が中心では難しいため、徐々に日常に戻していくことが大切だろう。
・退学という選択には、多分に個別的要素の強い理由があると想像されるが、コロナを理由とするもの、言語の壁を理由とするものなど、類型化ができる要因については、対策を立てうるものもあるのではないか。
・退学者の細かなデータベース化が必要。
・コロナ下での対応策としてはまだ発展途上だと思われる。
・退学者への対策が不十分であることは如何ともしがたいが、一定割合での退学者についての許容はあると思う。減少させることの努力もさることながら、理解を深めることのほうがこれからの学校運営には重要。
・学生の抱える課題が色濃く表れる部分であるため、引き続き検討を望む。

⑧学生募集

［本学院の現状］

緊急事態宣言中の期間を除き、新型コロナウイルス感染症対策や人数制限をして来校型イベントを実施した。加えてオンライン説明会・個別説明会を年間を通じて開催した。また、平日を中心に地方で開催されていたガイダンス業者主催の合同入学相談イベントから本学院独自の相談会に切り替え土日に開催し、独自相談会の参加者の多くが出願に結び付いた。

Web 出願システムを稼働させ、業務の効率化が図られた。

地元近隣で入学試験が受けられる現地試験の実施など柔軟な施策も引き続き行った。

多くの動画コンテンツを作成し、本学院 YouTube 公式チャンネルや Instagram に投稿、Twitter、TikTok などの SNS を活用し募集に努めた。

［学校関係者評価委員からの提言］

・Instagram や TikTok を駆使して広報するという、現代の 10 代に響く手法をいち早く取り入れた施策に敬意を表する。Instagram のフォロワー数 26,000 人は圧倒的な数である。今後も学生と協力しながら、魅力的な広報活動を期待する。
・時代に即した方法や仕組みを活用し、様々な取り組みが成果を出し学生に訴求できていることは評価すべきポイントである。
・次への対応策に向けた検証や、定点的に複数年の状況を検証するなど、今後につなげていくことを期待する。
・オンラインの活用による、地方での入学試験実施は、引き続き進めてほしい。

・好要因として円安持続傾向にあり、海外留学生の増加が見込める。海外留学生への校内対応のさらなる強化（言語・住居・文化）を行うことが必要だろう。そのうえで、日本の IP 活用した特徴のある、日本らしい、本学院らしい学科カリキュラムの開発が求められる。

⑨国際交流

［本学院の現状］

法令に基づいた適切な留学生の管理を継続して行った結果、東京出入国在留管理局留学審査部門より「適正校」の選定を受けた。

本学院は中国上海と中国大連に提携校が 2 校あり、随時協議を重ね協力、連携し、概ね順調に運営されている、今年度も引き続き未入国留学生については提携校の教室にて提携校の設備と人員の提供を受け、オンラインにて授業を実施した。

例年海外団体と連携してコラボレーション事業を行なっているが、今年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴いウェビナー等での交流となった。

［学校関係者評価委員からの提言］

・コロナ以降、海外との取り組みは難しい状況の中、次年度につなげる努力もし、文化服装学院の独自性を守っていると思う。引き続き関係者とのコミュニケーションを大切にし、具体的に取り組みの案を揉んでいくことを望む。
・オンラインでのコミュニケーションインフラを十分に活用し、諸々の活動を進めていることが理解できた。対面での活動と双方のメリットを活かしながら、今後も国際的なアクションを充実させていくことを期待する。
・時代に即した対応がなされている。
・東京出入国在留管理局留学審査部門より「適正校」の審査を受け法令に基づき対応がなされており高評価である。
・オンライン授業により、来日出来ない学生にも日本と同じ授業を提供できたことも高評価である。
・セミナー、コラボレーション活動が実施についても評価できる。
・今後のアフターコロナ対策として、海外留学生への校内対応のさらなる強化（言語・住居・文化）を行うことに期待する。
・適切に運営されていると思う。アフターコロナに向けて大きく発展が期待できる。

5.　学校関係者評価を受けて

学校関係者評価委員会の委員各位には、ご多忙の中委員をお引き受けくださり心より感謝申し上げます。外部の方々から学校運営ならびに教育活動に関し具体的な評価を頂戴することは今回で 10 度目となります。

今回もファッション業界における製造部門、人事部門、メディア部門、プロデュース部門等の皆様から多岐にわたり、幅広い視野での提言を頂戴することができ、改めて外部評価の重要性を痛感しております。また、日ごろの文化服装学院の教育活動に対し、賛同と高い評価をいただき大変ありがたく存じます。

2021 年度文化服装学院自己点検・評価に対する学校関係者委員から頂戴した提言を今後具体的に活用するため、内部評価委員を中心に検討会を開催していきます。

検討会では学校関係者委員からの多数の提言のうち、横断的かつ早急に取組む課題の共有を行い、次年度の目標とさせていただきます。検討会の結果は職員会議や文書で周知に努め、改善に取組んでまいります。

また本学院では創立 100 周年を間近に控え、永続的に教育活動を行っていくための様々な分野における再構築を進めております。今回頂戴したご意見はそちらにも生かす所存です。

今後とも自己点検・評価ならびに学校関係者評価を継続し取組んでまいりますので、皆様方のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

ご尽力いただきました委員各位には改めて深く感謝申し上げます。

6.　学校関係者評価委員会開催日程

第一回

2022 年 7 月 13 日（水）15：30～17：00

場所：文化服装学院　C 館 4 階　C041 国際会議室

メンバー（敬称略・順不同）

委員：澤田　勘志、芦川照和、中本文太、松本ルキ、木島広、矢野剛

オブザーバー：相原幸子、門井緑、早渕千加子、野原美香、
宮原勝一、朝日真、山口容子、飯塚有葉、井戸川倫也、
福田文子、飯島康志、渡井邦重、小林克也
吉田和代、間島未央子、三宅貴子

配布資料：・2021 年度文化服装学院自己点検・評価
・文化服装学院　自己点検・評価
内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表
・学校関係者評価委員名簿
・2021 年度学校案内書／学科一覧

第二回

2022 年 9 月 21 日（水）15：45～17：00

場所：文化服装学院　C 館 4 階　C041 国際会議室

メンバー（敬称略・順不同）

委員：澤田　勘志、芦川照和、中本文太、松本ルキ、木島広、矢野剛

オブザーバー：相原幸子、門井緑、早渕千加子、野原美香、
宮原勝一、朝日真、山口容子、飯塚有葉、井戸川倫也、
福田文子、飯島康志、渡井邦重、小林克也
吉田和代、間島未央子、三宅貴子

配布資料：・文化服装学院　自己点検・評価
内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表